

2003 年度 委員会活動成果報告

(2004 年 3 月 31 日作成)

委員会名	環境行動研究小委員会	主 査 名：鈴木毅
所属本委員会 (所属運営委員会)	建築計画委員会	委員長名：服部岬生
設 置 期 間	2000年4月 ~ 2004年3月	
設 置 目 的 各年度活動計画	<p>建築心理，環境心理学，設計方法，建築計画学分野の研究，及び企画・計画・設計された建築やアーバンデザインの事例において，明示的・暗示的に前提とされてきた人間？環境系モデルの理論的検討を行うとともに，環境・行動研究の役割を，建築学，建築デザインとの関連において具体的にケーススタディの見学・事例検討・評価等を通して明らかにする。</p> <p>初年度：環境行動研究分野を中心に，人間と環境の関係についての重要な捉え方が含まれる理論・事例を順次取り上げ，その特徴・背景・問題点を検討する。 2年度：建築計画学分野を中心に，人間と環境の関係についての重要な捉え方が含まれる理論・事例を順次取り上げ，その特徴・背景・問題点を検討する。 3年度：建築デザイン分野を中心に，人間と環境の関係についての重要な捉え方が含まれる理論・事例を順次取り上げ，その特徴・背景・問題点を検討する。 4年度：初年度から3年度の議論・検討の結果を踏まえて，環境行動研究，建築計画，デザイン分野を通して，人間と環境の関係がどのように捉えられているかを整理し成果の発表形態を検討する。</p>	
委員構成 (委員名(所属))	<p>環境行動研究小委員会</p> <p>舟橋 國男(大阪大学) 高橋 鷹志(新潟大学) 大野 隆造(東京工業大学) 沢田 知子(文化女子大学) 西出 和彦(東京大学) 鈴木 毅(大阪大学) 横山 勝樹(女子美術短期大学) 日色 真帆(愛知淑徳大学) 花里 俊廣(筑波大学) 足立 啓(和歌山大学) 小松 尚(名古屋大学) 西河 哲也(法政大学) 橘 弘志(実践女子大学) 三浦 研(京都大学) 森 一彦(大阪市立大学)</p>	<p>場所研究WG</p> <p>鈴木 毅(大阪大学) 小松 尚(名古屋大学) 西河 哲也(法政大学) 橘 弘志(実践女子大学) 三浦 研(京都大学) 森 一彦(大阪市立大学) 黒野 弘靖(新潟大学) 木多 道宏(大阪大学) 西田 徹(武庫川女子大) 岩佐 明彦(東京大学) 鈴木 健二(鹿児島大学) 隅谷 維子(ゼネラルデザイン) 金丸 まや(大阪大学) 松原 茂樹(大阪大学) 河合 美保(大阪市立大学)</p>
設置 WG (WG名:目的)	<p>場所研究WG</p> <p>人間と環境の関わりにおいて最も基本的な概念であり，建築にも関わりの深い「場所」について，環境行動研究とその周辺領域での研究の系譜，及び近年の新しい捉え方(居場所，居方，環境意向，生活資源としての場所等)について整理・検討する。また興味深い場所を対象とした見学会(施設，公共空間他)を実施し，場所の質とデザインについて検討する</p>	
2003年度予算	325,000円	

項 目	自己評価
委員会活動状況 (開催日・参加人数)	<p>7月24日環境行動研究小委員会+場所研究WG(建築会館)</p> <p>7月25日場所研究WG見学会+WS(広尾から六本木ヒルズ)12名</p> <p>9月4日場所研究WG見学会+WS(覚王山地区)16名</p> <p>10月2日環境行動研究小委員会(大阪大学)13名</p>
得られた成果	<p>(成果の具体的内容、成果の学術的・技術的・社会的価値、ホームページ等での公開の有無)</p> <p>建築心理, 環境心理学, 設計方法, 建築計画学における人間? 環境系モデルの検討を行うとともに, 環境行動研究の視点から興味深い, 具体的な場所の見学・ワークショップを実施し, その場の質を記述・分析・デザインする方法論について議論し整理した。こうした場所を訪れ体験を共有することによって, 個人的であった場所体験の実感が徐々に議論できるようになり, 次第に我々が価値をおいている場所の質を捉えるためのキーワードが浮かび上がってきた。以下に橋弘志委員によってまとめられた概念を列挙する。</p> <p>アクセシビリティ(誰でも好きな時にアクセスでき, コントロールできること), ポテンシャル・許容性(多様な機能・人の居方を含みうる環境のふところの深さ), 未完結性(つねにつくり出され続け, 変化させていくことができる), キーパーソン(場所に根を下ろしつつ公共性を高める顔の見える主), カスタマイズ・メンテナンス(場所の質を支える人々の日々の働きかけ), ルール・公共性・痕跡(ルールが時間を越えて共有され, 価値が重層化していく), 世界が広がっていくこと(新しい人・社会への広がり, 自分の存在が認知されていく)</p> <p>これらは, 従来の個人の感覚・心理をベースにした空間評価, あるいは単純な快適性(アメニティ)といった方法論ではほとんどカバーされていないものである。一言でいえば, 個人と組織人ではない他者との関係性の中で生まれて営まれていくものであり, こうした概念の不在が, 現代の建築が場所にならない主原因の一つではないかと思われる。</p> <p>これらの成果はホームページで発表の準備中であり, さらに, これを踏まえた「場所」に関する単行本出版の企画としてまとめた。なお以上の経過と概要については, 建築雑誌2004年1月号の「今伝えたいトピックス」欄に「体験される場所の豊かさを扱う方法論」として発表・報告している。</p>
目標の達成度	<p>(当初の活動計画と得られた成果との関係)</p> <p>当初の大きな命題である, 人間? 環境系に関する理論・モデルを整理するという点では, まだまだ不十分ではあるが, 委員各自が研究・注目している具体的な建物・場所・地域を見学し, 簡単なフィールドワークなどワークショップを活動の中心において議論を進めたことによって, 場所や人間? 環境関係についての注目すべき具体的な視点をある程度整理することができたという点で65%程度の達成度と言える。</p>
その他評価すべき事項	<p>公開研究会, 公開見学会・ワークショップによって, 委員間のみならず, 若手研究者, 学生の間で, 人間と環境の関係, 場所の質について具体的に議論し, 共有することができた。</p>